

乳幼児期の絵本の選び方と読み聞かせのポイント

年齢別

赤ちゃん

【0才】

10 か月くらいになると父、母の言葉を聞きながら絵本を楽しむことができるようになります。

また、この時期は遊ぶつもりでゆったりと読んであげてください。

無理に終わりまで読もうとしたり、集中してないからと、焦ったりしないでかまいません。

どんな絵本が良いか

■身の回りのものをしっかり描いた絵本。

(point)

自分が知っているもの、生活の中で使っているものは大人が想像する以上の喜びを与え、興味関心もぐっと高まる。

■果物のおいしさを目で味わったり、「さあどうぞ」という一言に、父・母から話しかけられているような心地よさを感じながら読んであげてください。

■「いないいないばあ」

隠れていたものが目の前に飛び出すことに大喜びします。

父母の声はもちろん、雨の音・風の音にも聞き耳を立て面白い響きやリズム、心地よい言葉を楽しむように。この時期の子どもは、特に柔らかな耳をもっています。

赤ちゃんと一緒に口ずさむことができる。

→このような経験を通じて、言葉の世界は大きく広がっていきます。

言葉を聞く楽しさや喜びを繰り返し味わった赤ちゃんは、言葉を具体的なイメージを心に描くことができるようになり、少しずつ話の流れを理解し、ものがたり絵本を楽しめるようになります。

認知力はまだ発達しておらず、絵の内容も理解できないため、絵よりも、言葉(音)を聞かせてあげるのが良いです。

「てんてんてん」のようなリズムカルな言葉中心の本がよい。ひざの上でリズムに合わせて揺らしたり、優しく語りかけてあげてください。

7 か月前後で、絵の認識ができるようになり、1 歳前後でまねっこあそびも盛んになります。

【0-2 歳】

どんな絵本が良いか

- めくると絵が変わる、ぱっと世界が開けるという 2 拍子の単純なリズムを楽しめるものを選んでみても良いです。

ちいさい人のいのちに明るい光を注ぐようにはっきりとした喜びの声で。

音音の[a][o]、子音の[P][b]をなるべく明快に読むよう意識させる。

- マルの中に・点があるような形に心ひかれる時期

絵本の単純な形が安心感を与える。

【1-2 歳】

- 言葉を覚え始める頃、「これ何?」「ゾウね!」と指さしながら、絵と言葉を一致させる。
- 音や声、色と一緒に心も動き出す時期。たいそうなストーリーではなく小さな楽しみのある絵本。
- 一語文が出始める。絵と言葉は一致しない。絵と言葉は一致しない。果物が出てきたら本物を目の前に差し出すなどして、絵と実際のものを一致させる。←ものの認知が発達。

【2-3 才】

- 心の動きも活発に。描かれている世界の中に自分も入り込んで心の伸び縮みを体験できる。
- 語彙が増え 300 語以上。
- 物の認識も進み、「これ何?」と質問攻め。
- 絵本でものと言語を一致させボキャブラリーを増やしてあげる。
- 自我が強まり、人の気持ちを理解し、想像力も膨らむため、シンプルなら物語の世界に入り込める。
- 見立て、つもり遊びも好き。

【3-4 才】

- 「なんでかな?」「こうしたらどうなる?」と自分で考えて不思議の国に果敢に向かっていく時期。
 - 主人公の行動やストーリーを追える。
 - 語彙 1500 語
 - 好き嫌いもはっきりし、人間らしい感情の土台が芽生える。
 - ギャングエイジ”。一定の自我が確立し、自分を押し通す時期。
 - 友達の中でも自分が一番だという思いが強くケンカが絶えない。
- 絵本を通して、他者の立場を考えるきっかけ作りを

【4-5 歳】

- 自分なりの考えをもち、「なぜ？」が増える。
- 泣くのも「恥ずかしい」、負けたことも「悔しい」と複雑な感情が出てくる。コンプレックスも出てくるからこそ憧れは強くたくましい。
- ヒーロー。力強い主人公のサクセスストーリーを好む。
- 絵本はフィクションとして考えるため、絵本を通して勇気づけられる。
- 言葉あそびも楽しめる。
- 他者への共感の気持ちがよだつ時期。少し長くてもリズムや音の響き、絵の力に助けられ、深い物語を自分流に味わえるように。

【5-6 歳】

- 文字を覚えるために一人で絵本を読ませたいと考える親が増える時期だが、親子の時間を大切にするためにも、これまで通り絵本や童話を読んであげて。
- 本来は「目に見えない言葉の世界」を、自分で思い描き、目に見える世界にする「想像力」こそが、じつは読書力です。好きな絵本を繰り返し読んでもらう中で、このような「読書力」を育んだ子どもは、文章が長く、構成が複雑な絵本も十分に楽しめるようになっていきます。

「こうはなんのひ」

「ももたろう」

「おおきなおおきなおいも」

「ブレーメンのおんがくたい」

「アンディとらいおん」

「はじめてのキャンプ」

このような絵本体験を積み重ねてきた子どもには是非お勧めしたいのが、絵童話の読み聞かせです。童話というと、「子どもがひとりで読むためのもの」と思われる方も多いかもしれませんが、それは違います。まずは大人に読んでもらって、挿絵を手がかりに創造力をふくらませることで、絵本と同じように、読み物の面白さを子どもたちは知ることができるのです。

【5-6 歳】

- 生活習慣はほぼ自立。
- 友だちの感情や行動もこれまでの経験から推し量れるなど心も安定する。
- 自分なりに物語を広げたり、作者の立場に立って物語の意図を考えることの出来る子もいる。
- 知的好奇心も高まり、命の輪廻や戦争、科学、身体の仕組み、生き物について触れたり、絵本にも興味を持つ。

6才ころになると、長い物語を毎日少しずつ読んでもらうことも楽しめるようになります。

「今日はここまで」厚めの本がそっととじられ、続きを想像しながら眠ることも楽しい思い出になります。この時期の童話は、耳から聞くのにふさわしいものであることが大切です。読み手も朗読しやすく、聞き手の子どもの想像力を引き出せる言葉で語られた童話がおすすめです。

「エルマーのぼうけん」

「いやいやえん」

「ももいろのきりん」

「くしゃみ くしゃみ 天のめくみ」

小学校入学を意識して、たくさんの種類の絵本を子どもに与えたいとか、文字を覚えるためにひとりで絵本を読ませたいと考えるお母さんやお父さんが増える時期です。お気持ちはわかりますが、ぐっところえて、親子の時間を大切にするためにも、これまで通りお母さんやお父さんが絵本や童話を読んであげてください。

絵本の役割（効果）

- 短い物語の中で「勇気」「愛情」「思いやり」「友情」「挑戦」といった人が生きていく上で大切な多くの「良いもの」を伝えてくれる。心のやわらかい子どもは、絵本の伝えるメッセージを潜在意識に素直に吸収し、行動の糧にしていくが大人になるにつれてこの潜在意識はなかなか触れられなくなる。しかし、読み聞かせによって絵本の内容が抵抗なく潜在意識に届くと感情や行動に自然と変化が起きる
- 手にとる人の心を寛大にする。思いやりに満ちた世界観で読み手の心も聞き手の心もときほぐし、励ましてくれる。

- ・心が寛大に育てられた子どもは、がまんがよくなります。
- ・思いやりにたくさん触れて育った子どもは、人を信頼します。
- ・励ましをたくさん受けて育つ子どもは、自信を持ちます。
- ・人にほめられて育ち、自己肯定感を心にいっぱい貯めた子どもは、自分を大事にし、感謝することを知る。

『子どもが育つ魔法の言葉』（ドロシー・ロー・ノルト着/PHP 研究所）

- 子どもは絵本を「知る」のではなく体験しているので、「寛大」「思いやり」「励まし」といった世界観を実体験として子どもたちに与えてくれる。

効果 1

①言葉のかくとく

絵本は子どもの心を育てる

乱暴な言葉はほとんど使われていない。

キレイで前向きな言葉、正しい日本語で語られている。

読み聞かせをすることで質の良い言葉に触れる機会が圧倒的に増える。

②言葉を覚え会話上手になる。(語いが増え、会話力が高まる)

幼児期は一生のうちで記憶力が最も高く、多くの言葉を習得することができる。

語いが多いと、会話が広がり、お互いの気持ちや考えがよく分かる。言葉が貧弱な人と会話をする
と、意図が正確に伝わらない。その人が言おうとしていることが見えない。言葉が豊かな人とはス
ムーズにいく仕事もトラブル続きなど日々の苦労多となる。

会話からも言葉は習得できるが、日常会話の言葉は限られている。

正しい日本語でないことも



絵本には普段使わないような美しい言葉や正しい日本語がたくさん使われている。特に形容詞・副
詞

ex. 「歩く」→「ひたひた歩く」「すいすい歩く」「よろよろ」「だらだら」

1つの動作でもより情景が浮かぶような表現。

自分の考えや意見をどれだけ相手にイメージさせることができるかで、結果は変わる。「ひたひた」

「よろよろ」など話す時に使って具体性を高めたり、相手が使った時に正しく理解したり、

「想像力を養う」「語いを増やす」「やさしい心を育む」「親子の絆を深める」

「世界観を持たせ視野を広げる」「文字を覚えさせる」

「学力向上のため...」

正しく効果的な読み聞かせ、適した絵本選び

言葉づかいや展開がいい加減な絵本ばかりだと、話し方が乱暴で、論理的に話を展開できない子どもになる。

↓

「超ヤバイ」「マジ」「ウッソー!」など流行語を使っているところでは、きちんとした言葉づかいや立ち振る舞いのできる人もいます。

☆この時期にいい加減な言葉を覚えるとあとで正しい日本語を身に付けるのは難しい。

絵本の読み聞かせ=母国語教育

幼児期は大変な勢いで言葉を吸収、だから質の良い絵本を。

☆アニメキャラのばかりだと、キャラの世界、特徴的なイラストに慣れて感性が磨かれない。

言葉を捉える感覚だけでなく芸術センスも幼児期にグンと伸びる。

読み聞かせは感性を養う役割。

イライラした気持ちを言葉にできたり、「後で貸して」など交渉もできるようにコミュニケーションがとれる=感情をダイレクトに伝えることが少なくなり、キレにくくなる。

「勉強できるようになる」

文章を、問題文を読むだけでひと苦労

想像力が養われていないと問題文を読んで数式を頭に思い浮かべることができない子。

全ての教科は書き言葉を読むことが前提

語が少なく先生の話が理解できない→集中できない→遅れる

言葉、全ての教材の土壌

効果 2

絵本は、あからさまに「嘘をついてはいけません」や「努力しなくてはなりません」等、押しつけがましく教え書かれているわけではない。

ストーリーを読んでいるだけで、気が付くように構成されている。

人格の基礎ができる幼児期にアンデルセン・グリム、イソップなどの童話、日本の昔話などたくさん読み聞かせられて育つのはいいこと。

相手の気持ちに寄り添う共感力

様々なジャンルの絵本に触れることで、文化の違いを感じ、感性が磨かれる。

→日本で海外の話が読める→翻訳されてまで世界中で。

文章も絵も芸術性が高く、質のよい、優れているということ。

読み聞かせによって子どもは、社会を生き抜く

コミュニケーション力を身に付けることができる

親子のコミュニケーションの楽しい時間

子どもにとって心の栄養が得られる場

「だから~なのよ」と解釈を押し付ける×全て子ども自身が気づくもの。

大人が言ってしまうと、本からの学びではなくなる。本の内容にアンテナを張らなくなる

☆読書はそれぞれの感じ方で。教職の押しつけ×

■聞く力を育てる

耳から言葉が入り、聞いて理解する力を育てる。言葉からイメージする力を育てる。

■本に対する興味を育む。

読み聞かせをしてもらうことで自分でも本を読むようになり 本好きになる。

脳が健康になる。

活発に働かせるほど機能は高まっていく。(親も子も)

■喜怒哀楽が分かるようになる。

生物としていちばん基本的な行動に結びつく。↓

理性以前の行動がきちっとできるように。

効果 3

同じ本を何回も読んで、もっと笑わせよう。

相手の「ねっ!」などの反応を楽しみながら、怖がらせよう気持ちも→自然にしている

ねらい通り「やった!」

子どもをよく観察して反応を楽しむ

親子の間に様々なコミュニケーションが生みだされるコミュニケーション力育する。

子どもの気持ちを考えて、あるいは主人公に なったつもりでコミュの部分活動強いようになる。

子どものちょっとした変化に気づけるようになる

■ほめ上手になる。

■子どもを見る→変化に気づく→ほめる→お互い嬉しい→こうしたら成長するかもと考える→さら
によく見るようになる→成長ぶりを楽しめる→大人のうれしいももっとふえる。
→コミュニケーションが深めまる→絆ができる。

■大人の前頭連合野をよりよく働かせ、健やかに 保つためにすごくよい。

■身近な人の温かい交流を感じる

■愛情を込めて読み聞かせをすると 子どもの心は安定する

読み聞かせをすればするほど親子両方に幸福感が 生まれ、親子の強い絆や信頼感、親密さにつな
がる。

信頼関係が結ばれていると、子どもにとっての親は安全地帯になり「人は信じられるものだ」とい
う考えを身に付ける。

→他の人々とも親密な人間関係を自然と作れるようになり、新しい集団にも臆することなく溶け込
める効果が 生まれる。

■社会で求められているコミュニケーション力を育むきっかけになる。

「親密な人間関係を築く力」を与えてあげることが、とても重要。両親、祖父母、誰もが子どもに子
どもがただ愛おしい」という思いが。

- 絵本の中で様々なことに出会い、いろんなことを感じ知識を得る。たくさんの絵本に親しむことは
幼児期の生活をより豊かにしてくれる。
- 小中高以降も読書を好むようになる。
- 早い時期から始めると人の話を聴く力が育つ、集中力も付く

■子どもの脳思考・創造などをつかさどる前頭連合野ではなく情動、感情に関係する大脳辺縁系、つまり、言葉からイメージして「理解しているのではなく感情を動かして体験」している状態、絵本の世界に入り込んで 物語を体験している。

■感情は人間の基本的な行動に結びつく。

読み聞かせて育てることでこれらの感情が分かる子に育つ。

ディズニーのリピーター率は 90%以上

知るだけなら 1 回でも十分何回も乗りたいのは感情を動かす体験だから、子どもは絵本を「体験している」「楽し体験だった。」

■登場人物に感情移入して絵本を体験

■行間を自分の知識・経験・価値観で補い無意識に心を投影

■生後 5 か月の赤ちゃんに、母国語で話しかけた時の脳の活動は、言葉が分かる子どもの脳の反応と全く同じ。逆回しでも反応するが、ちゃんとした言葉の時が一番反応が強い。

言葉の意味を理解していなくても、言葉を聞こうとするように脳が働いている。

言葉の獲得

どんな言葉と触れたかで心や頭の成長の方向が変わる。

「バカ」「ウザイ」など乱暴な言葉に接していると、乱暴な言葉で話し、物事を考えるようになる。

顔つきや態度も乱暴に。

→それが普通に

キレイな言葉・前向きな言葉に接していると、美しい言葉で話し、前向きな言葉で物

事を考えることが普通に。

↓

絵本は子どもの心を育てる。

乱暴な言葉はほとんど使われていない

キレイで前向きな言葉、正しい日本語で語られている。

読み聞かせをすることで質の良い言葉に触れる機会が増える。

(若干重複する内容かもしれませんが。)

読み方

■寝る前よりも朝がいい

話を最後まで聞かないで寝る。読み切れないことも

怖い話の場合、夢に出てきてうなされるなど脳にあまりいい影響を与えない。

朝 1 日の中で最も脳が働いている時間吸収率も高まる

読み手も夜の疲れた状態で読むよりは表情豊かに生き生き読める。10~15 分の早起きで十分な時間の確保

■朝 2 冊夜 3 冊とかでもいい

■聞いていなくても最後まで読み切る

「最後まで聞いていなさい!!」×

→途中からおもちゃで遊ぶ 無理やり座らせる×おもちゃを取り上げる

→

絵本が始まると、おもちゃを取り上げられる、座るよう注意されると思い込み、嫌がるように

■子どもがどこかへ行ってしまうても、楽しそうに声をしっかり出して絵本を最後まで読み続ける、子どもは、一見聞いてないように 見えても実は耳を傾けている。楽しそうだから戻ってきたり興味あるページの時は近くに寄ってきたり、

聞いていない=興味ないではない。

「七ひきの子ヤギ」興味なかったが、ハサミを使うようになって 興味深く聞くように。

生活経験を積めば興味を持つ

■長くても最後まで読み切る 長いから続きは次回のお楽しみ×

途中でやめたり、続きから読むと、子どもは不満が溜まる。

反復することで様々なことに気づき覚えていくのにその機会も逸してしまう。

■子どものリクエストに従う

読んでいるページ以外のページをめくってきたら話がつながらなくても、リクエストのページを読んで。

☆「ここを読んで」というページを読んであげる。

ページをめくる=今のページに興味ない

興味を示している部分から進める

とくに2~3歳くらいの子どもは、絵やイラスト自体に

興味を持つことが往々にしてある。

いつも同じ絵を見て飽きずに「きゃっきゃ」

この時期は絵を見て話しかけるだけでも十分、次第にストーリーに興味持つ

話の展開に理解を求めるのではなく、絵を眺めたり、一緒に

お話をするための親子のコミュニケーションツールとして考える

■「これ読んで」を再優先にする

(読んでいる途中で違う絵本を持ってくる

読んでいる本はもうつまらない。

興味は失せているので☆新しく持ってきた絵本に変える

■読み聞かせの時間はあくまで楽しい時間

我慢させてしまっては本が嫌いになってしまう。

読み方 2

心こめて読まない、無表情で読めとは言っていない!

■感情を適度に入れて読む

作者の意図を正確に伝えるため、行間を読み取らせるため、
オーバーな表現を避け、感情を入れずに「感情がこもらない言葉には力がない」という人もいる。

☆淡々と読み聞かせるのではなく、ある程度感情を入れて
まんが日本昔ばなしのナレーションの語り口をイメージ
やわらかな気持ちになるようなほっこり感が出せると理想的

■シーンに合った表情で

内容に応じた読み方をする事で「この言葉は楽しい時に使う言葉なのだ」「悲しい時に…」と
と学んでいく、

なので楽しい物語なら楽しく、元気になる物語なら元気に ☆内容に合わせて、声も顔の表情も変える。

マッチ売りの少女が死んでしまう悲しいシーンを笑みを浮かべてたら 人の死を軽いものだと、やまんばが包丁を持ってるシーンを、おだやかな表情で読んでしまったら包丁を向け襲われることがどんなに悲しいことなのか理解できない。

ぎおんご「とぼとぼ」「がたんごとん」などの擬音も大好き、ぎたいご役者になったつもりで表情をつけて

■オーバーに読みすぎない、声を極端に使いすぎ×

オーバーリアクションに目が行ってストーリーが頭に入りにくくなる

→読み手の顔や身体に注目してしまう。読み手のアクションに引きずられ お話を想像することなくイメージを限定してしまう恐れも、 歌のシーンは、自分で読めるようになった時、自由にメロディが 付けられるよう印象の弱い鼻歌程度で、

心の栄養が得られる場

食事、風呂、歯磨きと同じように、読み聞かせも

日々の生活に組み込んでしまう

最低1冊は毎日、→習慣化(本を読むことが)

忙しくて読む時間がない→忙しくてごはん抜きにはならない

ゆっと読みすぎない

子どもは、大人が話す日常会話を普通のスピードで聞いて どんどん言葉を吸収

☆絵本の読み聞かせだからとゆっくり読む必要はない ゆっこだとかえって文章のまとまりがわかりにくくなり 意味も言葉も頭に入らなくなる。

日常会話のスピードで、シーンに合わせて口にしたたりやっくりにしたり変化をつけるとよい
句読点を忠実に守る必要はない。

息継ぎの目安

何才からでもいい

0才児 言葉を教えたり習慣化することが目的ではない。「親子の絆を深めるもの」

赤ちゃんは言葉をかけてもらうことで自分がかけがえのない存在として 愛され大切にされていることを実感し喜びを感じる。

脳の発達に欠かせない

☆ストーリー性よりも見ていて幸せになる絵や身近なもの 食べ物、動物、家の中のもの
絵本を手で扱いたり、引っ張ったり→楽しんでる証拠

読み方 3

- 髪がページにかぶさらないように、後ろに束ね前かがみにならないように姿勢よく
- 腕時計や指輪、キラキラしたネイルなどがしてあれば気が散り、目線が集まってしまう
- 服装は黒かそれに準ずる絵柄のないものと、指示されている場合もある。
- 自分の身体まるごと絵本の世界とひとつなぎになっている意識を

■カバーや帯は外す。

■開きぐせをつける。

- 下読みをする「先の展開が分らないと、とんちんかな声でキャラクターづくり 黙読で理解するだけでは、美しい言葉の響きのところを読み飛ばす可能性がある。

実際に声に出して読むことで、どこに間を作ればよいのか、読みの流れをイメージできるように。

- 利き手で「のど」の下の部分を持つ(絵が隠れないように)

横書きの絵本は、

身体の右に側に持ち、右手で絵本を支え、左手で左から右へめくる方が、見てる人の視線をじゃませず自然

縦書きの絵本は、左側に持ち、内側から外側へ

- 読み手が本来持っている個性を生かし、人生経験や、価値観、 思いを自然な感情とともに表現する

→子どもが楽しむ。教育的にも自分の感受性、共感力を豊かにし、幼い頃から自然にと親しめるコミュニケーション能力を育てる

- 感想を聞かない

読み聞かせの間、心の中でいろんなことを感じている。閉じた後もその思いを膨らませている。

「どうだった?」と感想を聞かれたとたん、頭で考えはじめる。思いを膨らませて感受性を育てていた状態から 頭で言語能力を発揮していく作業に切り替わってしまう。

幼い子どもは 言語能力が乏しいため、感じていることを言葉にできず混乱してしまう。

- 読み聞かせは「ほめる時間に」

結果ではなく、努力した部分をほめてあげる。

努力をほめられると、何かを自分で切り開いてゆく事が楽しくなり、やればできる!と自己肯定感が生まれる 言葉を理解できないうちでも親の雰囲気ではめられたことを感じ取っている。

環境

①リラックスできる小さな空間

絵本の世界に集中できるよう周りに気が散るものが少ない Tu.music 消す リビングより寝室、狭い部屋や壁に囲まれた位置→壁に声が反響して子どもを包む!

②お気に入りには決まってるからといつも同じはもったいない。心はいつも変化している。変化に合ったものを

③表紙もしっかり読む（本の始まり）

④耳で追いながら目で絵を見ている。

ゆっくり読んだ方がそれぞれのシーンを理解し、大人も子どもも味わう時間を 持つことができる。

- 10冊を1回ではなく1冊を10回10回違うことを見つけ、深まっていく、同じ本を何回も読むから本を好きになるつでできるだけ買い与えて。
自分の本だから登場人物が、心の中で生き続ける。

選び方

ぐるんぱのようちえんいたずらきかんしゃちゅうちゅう

「成人式を終えた絵本」

出版されてから20年以上子どもたちに喜ばれてきた絵本時代は変わっても子どもの心の成長に、必要なものは変わらないはず。一過性の流行ではない作品も大切。

選んではいけない

菓子を食べないマナー教えるのにいい場所。

図書館で済ましてしまう

子どもは毎日同じ本を飽きず読んでと持ってくる。

繰り返し1冊の本を読んでもらうことで言葉を覚える。

本屋で買う好きな1冊を見つける。

よい習慣を身につけるために利用

なんで売れているのか分からないもの

「ランキング1位」「大人気」評価が悪く短命なことも

どんな理由で1位でどんな人から評価されているのかあらゆる面から売れてる理由を検証。

10年20年前のものでもOK、長く存在するには理由がある。

たくさんの本が刊行される中、消えてゆく中、昔話でもない。

10年前が残っているということはたくさんの人が買ってきたということ。

「てぶくろ」

「3びきのくま」

「ちいさいおうち」

「はらぺこあおむし」

「かいじゅうたちのいるところ」

どんなに時代が変わっても人々の心をつかんで放さないものがある。

流行もの、新しいものに惑わされず”よい本を選んで。

カタカナを使っていないもの

絵本で「ぶうる」→「プール」になると混乱 「ぶうる」を探してもない。

実生活で、社会でカタカナで表記されているものは最初からカタカナで。

漢字を全く使っていないもの

昔で聞いて話は知っていても改めて文字で接することで発見できることも、漢字がそれ自身で意味を持つ目で見える言葉だから。

はな／花／鼻／華／雨／飴／など漢字表記にするだけで意味が明確に。

その気づきから漢字を覚えていく。

■ひらがなはそれ自身では意味を持たないため、何かをイメージしながら読むのに適さない。

■絵が文章に合っていないもの

登場人物の持ち物や服装、背景などが物語の内容と 違うことがある。

イラストの雰囲気が物語の世界と合っていないものがある

日本の昔話なのにメリハリがありすぎる色使い、原色をおいだけ。

日本の昔話の絵本はくすんだ色をふんだんに使っているもの。

家の造り、着物の色・小物が物語と合った色や質感で描かれていれば、その物語を深く味わうことができ感性が磨かれる。

■「よだかの星」→醜い容貌の鳥を表すために、茶色・こげ茶・黄土色 などさまざまな茶色を使っている。

■かぐや姫 だんだん着物の質が良くなる

文章だけでなく絵からも伝わるものがある。文章と絵の雰囲気が リンクしているものを。海外の童話は、お国柄がよく表われている絵のものを。

■文読みにくいもの→読む時に止まってしまう、キレイな日本語を開かせることができない

子が読む時も変に疲れたり、目に悪影響

■絵が文章で隠れたり、文章が絵会に隠れていないものを

■結末があいまいなもの

同じ物語でも本によって結末が違うことがある。悪が徹底的に 倒される勧善懲悪ものを、因果応報、勧善懲悪を教訓として 教える必要がある。

「七ひきの子やぎ」 子どもを助けた後、オオカミと仲直りして幸せに暮らす 結末のものがある。

一見、やさしいように思えるが、悪いことをしたオオカミ側からすると、悪いことをしても許されるととれ、学びにならない。

TV やネットで残酷なことが、

選んではいけない 2.

子どもに悪い影響を与えているという話があるが TV の場合、残酷、残虐なシーンをリアルに見せつけるのに対し、本の場合は言葉でこと細かく説明するわけではないので、子どもへの影響は異なる。

徹底的に悪がやられる結末から、正義感や良心が育つ

※限度はある。

「オオカミは子ヤギを食べようと食らいつきました。子力は肉が引きちぎられ、血を流しながらも悲鳴を上げて逃げ回り」

と書いてたら、子どもの頭は物語よりもそのシーンでいっぱい、ショックを受けてしまう。

↓

残酷すぎる表現のもの

心を育む経験をさせるもの。ショッキングな経験をさせるものではない

◎な日本語のもの

「メチャクチャ悲しくなりました」「マジでヤバイ」「ウソデショ？」

「胸が張り裂けそうなほど、悲しくなりました。」

正しく美しい日本語と触れる時間に

読み方が流行調にならないように。

■音が出たり仕掛けがあるものは「おもちゃよ」み聞かせ向きではない。

■付録がついているもの

☆全てではないが、廉価で作られた本は、内容、文章、イラストが雑であることが多く、読み聞かせには向いてないお勧めではない。

■シリーズものに注意

通常は内容に合わせてページや大きさ、デザインが決まる。

6 シリーズ本 シリーズ本や定期購読の絵本は、定価を一定にするために、

全て同じページ数になっていることがほとんど。話を無理に収まるように短くしたり、話の雰囲気に合わせてなくても同じような絵を使っていたりする。

■省略するために手を加えることで、昔話の教訓が伝わらなくなってしまうことも

シリーズでも丁寧に作られてるものもある。

ライトなシリーズではなく物語が正しく伝わるものを。

こんなところをチェック

■絵が確かに描かれていないか

■言葉づかいが乱暴ではないか

■マンガ・アニメ調になってないか

イラストの色使いが内容に合っているか(音話なのに明るすぎる色を使っていなか・ストーリー展開と関係ないページが多せないか)文字を数えるようなページが付いていたり、広告・宣伝文句が巻末についてないか

名作ではない昔話

昔話は同じストーリーが多くの出版社から 刊行されている。

「ももたろう」

「三びきのこぶた」

は同じタイトルの絵本が 20 種類以上。

中には 物語の内容が変えられていたり、人物が キャラクター化されていたり、受け継がれてきた。

本質をふまえてないもの

「名作」とタイトルに あるものやキャラクター化されているものは避ける方がよい

やってはいけない

■すぐに感想を聞く「どうだった?」「いちばん悪いのは誰?」誰が出てきた?

子どもたちの脳や頭の中には様々な思いが生まれている。思いを整理して自分のものにするにはある程度の時間が必要。すぐ感想を聞くと無理やり答えなくてはならない。

■読んだら読みっぱなし

「楽しかったね」「怖かったね」と気持ちを共有する簡単な言葉の交換だけで、おしまい良くない。

■あれこれ説明する。

「この意味はね…」物語への集中力を邪魔してしまう。

予期せぬびっくりした表情で「何かあったんだな」と悟る。この繰り返しで次第に意味が分かる。

■途中で質問をしながら

現実世界に引き戻され、さめてしまう。

0.1.2 オコミュニケーションのツールとしては◎

「これなあに、動物いたね」絵本の世界を味わいながら親子で楽しい時間

■子どもの質問あとまわし、

質問されたら、さらっと答えて、後で調べて教えることで、物語への興味がさらに深まる

「最後まで黙って聞いてなさい!」×

「そうね、動物園だったね」とその言葉を繰り返すことで、大好きな人に共感してもらえたと感じ、うれしくなる。

次々質問してくるのは興味出てきた証拠

話が中断しても丁寧に答えて。

「なぜかしらね」と聞き返したり一緒に考えたりしても Good

■悲しい結末を退ける

普段の生活ではなかなか体験できないことを擬似体験することがある。

よみかせは感性を磨く働きもある様な感情を味わう。

CD・DVD との違い

プロの声優や俳優の朗読した CD、DVD 付きの本

プロだからいいもの×

人の脳は生の人間の声に反応する仕組、子どもの声はなおさら

母、父、家族・先生の声に優先的に反応する

☆目と目を合わせ読み聞かせるからこそ心と心のキャッチボールができる。

絵本を読むと想像力が養われる

→絵が描いてある時点でイメージが限定されてしまい想像力を奪うのでは？

→全ての絵が描かれているわけではない。

読み聞かせの間、子どもは絵本の絵を手がかりに、読み手の声、言葉を聞き、オリジナルの絵を頭に思い絵描く作業をする。

見えない絵を自分で作る作業が想像力を養うことになる。

この繰り返して想像力が強化され、絵本の絵が邪魔になる

絵本の読み聞かせで語彙が豊富になると、絵の少ない絵本を選ぶように。

物語の世界を想像するだけでなく、想像の世界を膨らませ、主人公として物語の世界を旅したり、主人公の友達や敵として世界を自由に旅することもできる。

人生経験によって価値観が違うため、一人ひとり全く違う物語に。

DVD や TV は、画面がどんどん変わり、子どもが考える時間もない。

全てがイラスト、映像になってるため脳が怠けてしまい言語力も何かない想像力養えない。押しつけているだけになる。

DVD、TV は作り手の世界を DVD や TV はあくまで楽しむもの。

推奨絵本

「オオカミ少年」

嘘をついてはいけないこと、言葉の怖さ。

「安寿姫と厨子王丸」

親子がバラバラになる悲しいストーリー。

その悲しさを物語を通して疑似体験することで、家族の絆の大切さを感じ、現実に関心のない友達の気持ちを推察できるようになる。

→相手の気持ちに寄り添う共感力

「花咲爺」

欲をかいたり、動物をいじめたりすると、たとえその時はよくても神様は見ている最終的に罰として返ってくる。

→このような積み重ねで善悪の判断ができるようになり、良心が養われる。

その他

「こぶとりじいさん」／「一寸法師」／「さるかに合戦」／「かちかち山」／「おむすびころりん」
「おおかみと七ひきの小やぎ」／「ももたろう」／「舌切雀」／「金のさかな」／「赤ずきん」
「みにくいあひるの子」

「スーホの白い馬」／「シナの五にんきょうだい」／「王さまと九人のきょうだい」

など本を通して海外の生活を疑似体験できる。

その独特の生活習慣も描かれているため、旅行に行かずその国の考え方や暮らしぶりを知ることができる

→様々なジャンルの絵本に触れることで文化の違い、感性が磨かれる。

「北風と太陽」

相手に意見を聞いてもらうには、「相手の心を開く」「自発的にそうするように相手に働きかける」ことを教えてくれる。

「はだかの王様」「すっぱいぶどう」など生き方の極意が入っている。

幼い頃からこうした教えのある物語を開き続けることで心のどこかに刻み込まれ 行動の指針になる。

☆読み聞かせによって子どもは社会を生き抜くコミュニケーション力を 身につけることができる。

電車の本

電車に関する絵本は特急や新幹線に乗って旅する話が大半。

その分絵のディテールが細かい。轢風景、車両、乗客が丁寧 絵を通して会話を広げることができる。

電車の思い出を語るきっかけ、そんな余白が電車の本にはある。

0-1 才

「がたんごとんがたんごとん」のように同じことが繰り返されるので「次は何が来るかな」と語りかけたり、自分で考えることの面白さを学ぶ

2-3 才

絵本の世界と実物がつながる時期

おもちゃの車や飛行機を並べ、絵本のもものと一緒だと 認識されると理解が深まる

4~

乗り物や旅に関する話をして、絵本の世界を広げる

読み方

腰骨や肩を使って絵本を安定させる。

右トジの本は左側に持ち、左の腰骨を使って固定。

顔と絵本が近いと、読み手の顔の変化に意識がいつてしまう。

腰の位置がベスト。

★お腹で控え込むように持つ。上からのぞき込むことで、絵本を隠したり、下向きに声を出すことで、声
がこもって 子どもたちに届きづらくなる。

★絵本が揺れると、電車で読む感覚に。「落ち着いて見たい」に意識がいく。

↓

台に乗せると、テレビを見ている感覚になり、人の温もりがなくなるという意見、大型は2人で。

座る

落ち着いて安定した感覚が強調され、じっくり長く聞く空間ができる。

静かに聞かせていく話向き(敬語、トークショー)

立つ

空気の動きや躍動感、パワフルな空間が作れる。(演説・スピーチ・漫才) 読み聞かせに自信ない人向き。

子どもは、変化、動き・展開が好きなので躍動感ある方が 最後まで静かに集中してくれる声も遠くまで届く。

子どもが集中する場、わくわくスポットを作る。

1 なるべく一か所に集め、注意を向けやすくする

2 視線の先に、動くもの、揺るもののある景色を入れない壁を背にして丘?

3 扇状に座ってもらう、絵本左右にしなくていい。

4 靴を脱いでシートに座る。リラックスして、子が散らばらずまとまる効果

5 肩が触れ合うくらい寄り添って座る。隣の子の楽しさやドキドキが体を通して伝わりやすく盛り上がる環境になる。

「Wの法則」

Wになるように視線を動かしながら話をするとう長く静かに聞く、移動の間は目は合わせなくて大丈夫。



○で視線を止めて目を合わせる

会場全員が、「私を見ている」と思ってくれる。

自分を「見てもらっている」と感じると、相手の話を聞こうと思う。

読み聞かせはコミュニケーション

間が持たない→早いタイミングでページをめくる子どもは前のめりに なって「見ている途中だったのに...」
と思う。焦ってページをめくるとその焦りが子どもたちに伝わる「もっと眺めていたいよ!」と不満を感じる。

「1枚の絵は1000の言葉」これが分かると、絵だけのページをじっくり見せることに不安がなくなる。

子どもたちは、大人がびっくりするほど、絵本の細かいところまで見ている。

文のない絵だけのページ

読み手は無言のまま見せることが大切。絵本は絵も物語を伝える文字。

「絵だけをじっくり見せる時間がお話の流れを止めてしまう」×

絵からも物語を読み 取っているのでじっくりと待って大丈夫。

無言の時間にたえられない理由 下読みをしていて、物語の『先』を知っているから、

1) 右から左にゆっくり動かして正面で止める。

2) 読み手が心で話しつつける。

「こんな所にいたんだ」「すごいね」「次どうなるかな」

裏表紙も見せる。お話の結果や主人公たちのその後の様子が絵だけで物語っていることも多い。

読み方

助詞のあとに、心の中で「ね」文の終わりの「まるの後には」「そうなんだって」と心の中で言う。

ページをめくる時や、新しい展開の前には「このあとどうなるのかな」など、そうすると、子どもたちに話しかけるように読むことができるようになりうなずいてくれるようになる。

「読んでしまう読み聞かせ」から「話しかける」「読み聞かせ」に変わっていく。

子どもたちがうなずいてくれると、

上手に間が取れ、早口が直る効果、話の内容をよく伝わる。

この間で今まで聞いた内容を反復しているので理解度も高くなる。

くまちゃんは(ね)、お日さまに干した(ね)、ふかふかのお布団で(ね)(どうなったと思う?)ぐっすりねむしました。(よかったね)

心の目で子どもを見続ける。

文章を読む時は絵本の方を向くが、意識や気持ちは常に子どもに向けられていると、子どもたちを向いているように、第三の目

読み手に集中

ex、天ぶらを揚げている時 P110

文の二、三行に1回は、言葉のボールを受けとれているかを、子どもの目を見て確認→読み手に大切にしてもらっていることが分かり、目を輝かして開く。

淡々と棒読み？

感情を入れずに淡々と読む方法が子どもの想像力やイメージ力を育む効果があると言われている。

話の内容を聞かせることにも向いている。だが、読み手も子どもも楽しいか??

「読み手の自然とわいてくる感情もこめて臨場感を出して読む」方法は「楽しそうに身を乗り出し、感受性を共感力、コミュニケーション能力を身に付けるのに役立つ。

現実の経験や知識がなく、想像するもの自体が自分の中に存在しない幼い子どもたちに向いている。

読み手の自然な感情に触れることで、「こういうことは嬉しいのか」「こうなると悲しいのか」という感受性を養い、他人と共感する力を身に付ける。

(絵がしっかり見えているが)読手と離れるほど、「自分は勝手なことをしていても気づかれない」という意識が芽生える子がいる。

「見えてるかな」というちょっとした気遣いから、心がつながる。

読み聞かせ前の言葉かけ、

どんな話かな楽しみだねくらいで、あまり物語の内容には触れないで、

「おおかみは怖いね」「今日のおおかみはおもしろいです」など、最初に先入観を与えてしまうと、自由に感じる範囲を制限してしまう。「どんなおおかみかな」と思いながら聞く方が、自由に楽しめて、集中できる。

体験でわくわくするには臨場感が大切。距離・方向、動作を確認しておく

1 距離感を意識して発声することでセリフが生き生きする

ex 目の前の人に「ごはんできたよ」台所からリビングでTV見てる人に

「ごはんできたよ」では声の大きさが違う。

2 方向を意識して発声する

ex 道ですれ違った人に「こんにちは」マンションの2階のベランダを見上げながらの「こんにちは」。

少しでも下や上を向いて声を出すと、臨場感が増す。

3 動作を意識して発声する。

道で会った人に、「こんにちは」お辞儀をしながら言うのと、軽く手を挙げながら言うのでは声の調子が変わる。

4 温度におい音を感じながら、

たんぽぽが描いてあるなら、季節は春、ぽかぽかの太陽の温かさを

感じながら、話すと、その空間は春に。

読み方

0 歳

キャラクターの声

幼い子どもの場合は、そのキャラクターを指さして  ます。

ただし、絵を指したとたん、これは私の上でのできごとなんだ」と気持ちが一瞬で覚めてしまうということもある。できれば 指すのではなく、声だけでキャラクターを区別してあげられるとよい。

小さいお姫さまは「高くてかわいい声」、太っている王子様は「太く低い声」を作ろうとするが、ワンパターンではなくもっと自由で大丈夫。

声だけでなく喜怒哀楽の表現でキャラクターを区別する方法もある。せっかちな性格なら早口で、野原の真ん中で一人ぼかぼか日なたぼっこならゆっくり。

高い/低い早口/ゆっくり:大きな声で元気~/小さな声でおとなしく 組み合わせてもいい。

これで 6 種類。組み合わせても良い。

コツは前の声と逆のイメージを次の声で使うこと。

1 歳

認知力が未発達

絵の内容も理解できない。

1才近くになると、真似っこが盛んに、

- ・母国語の響きを感じられる
 - ・五感を刺激
 - ・絵よりも言葉(音)を聞かせられるもの
 - ・単純なリズムが楽しめるもの
 - ・8か月頃までは音の響きがよく明暗がはっきりしたものを、
 - ・言葉の意味が理解できず、視力も十分には発達していない。
 - ・音の響きやリズムを耳で聞いて楽しめるもの、色や形が認識しやすいもの 09 ヶ月頃~ページをめくって変わる変化を楽しめる
 - ・目えていない向こう側になにかあるとわかってくる時期
- 自分で触ってめくろうとする時期
- ・同じストーリーを繰り返しながら想像力や予想力を育める ○読んで遊びながらルールを覚える力も備わってくる
 - ・12 ヶ月前後丈夫で破れにくい本を。
指先が発達してくるので自分でページをめくれるようになる 物語は理解できなくてもめくったり戻したりを楽しめる。
 - ・日常生活にあるものが出てくる本→認知力、表現力ゆ 知っているものが出てくると、手を押いたり、指さしたりして喜ぶ。 自分の知っているものを相手に知らせ共感を得ようとするので 会話につながってくる。
 - ・たくさんコミュニケーションがとれそうな本
 - ・物や動物が正面を向いてる本
絵本の中と、子どもが向き合って対話ができるような構成
 - ・一語文(言葉も伝える)
 - ・できることが増え、表情が豊かに
見立てやごっこ遊びがはじまり、登場人物と自分を一体化して主人公になりきって楽しめる。
歩き出し、身の回りのことが気になる。

2 歳

- ・ (周が気になる)日常生活の本
- ・ 声に出したい本(2 才の言語の爆発期に向けて、1 才の間に蓄積 ○想像力・表情力・創造力を育み感性や学ぶキンを養う
- ・ 気持ちを他者と分かち合う.
- ・ 絵と実際のものを一致、(物の認知も発送に絵本も楽しめる)。
- ・ 自分以外の他の存在を認め、物の認知を発達させ他者と気持ちを分かち合う
- ・ 子どもと触れ合う時間を作ることで、情緒の安定や信頼関係を築く。
- ・ 見立て、つもり、真似っこ遊びを楽しむ.

想像力のみ

質問攻め(物の認識の進み)

- ・ 自分の気持ちが上手く伝えられなかったり処理できなかった。

イヤイヤ期

- ・ 会話が広がる。(ごい増える 300 以上
- ・ 自我が強まる・自分でやりたい
- ・ 自由に走れるようになり、日常では動き足りないことも。
- ・ 基本的な生活習慣を身に付ける
- ・ シンプルなら物語の中に入り込める。
- ・ 体を動かす絵本
- ・ 感情を知ったり、いろんな気持ちに出会ったり、他者の立場を考えられるもの。
- ・ 生活習慣がテーマの本(日常で必要なことを知る)(生活力を身に付ける)
- ・ イヤイヤに出会う、
- ・ 真似できるもの
- ・ 言葉とものを一致させ、ボキャブラリーを増やしてあげる。

マナーの本

3 歳

- ・語いが増え、おしゃべり上手に、コミュニケーションの幅が広がる
- ・好き嫌いがはっきりし、人間らしい感情の土台が芽生え、 ギャングエイジ
- ・自我の確立、自分でやりたい
- ・「自分が1番」の気持ちから、自分を押し通したり、ケンカも増える。
- ・幼稚園が始まったり、弟妹が生まれたり、一人遊びから友達と遊ぶようになったりと、人との関わりが広がる時期
- ・絵本にも入り込めるようになってくる。(主人公の行動やストーリーが追える)
- ・相手の気持ちを汲み取れる時があればわがままな時も多い時期
- ・他者の立場を考えるきっかけ、この時はどうしたらいいのか考えるきっかけ ○知ること考えることのおもしろさを知る
- ・人との関わり、コミュニケーション、いろんな気持ちに出会える本
- ・生活習慣がテーマの本(自分でやりたい)
- ・わかりやすい起承転結(複雑だと興味を失うかも)。シンプルなストーリーで 身近な題材がテーマのもの
主人公に起こるエピソードを自分にあてはめて読み進められるため、
あいさつやマナーも身につけやすい、手伝い片付け、歯みがき着替え、排泄
- ・形や数の大小、量の基本概念について少しずつわかってくる。
- ・(登場人物を数えるなど)数遊びができるもの
- ・季節の興味も出てくる。
- ・行事がテーマのものや、1冊で1年を追えるもの
四季ごとの遊び方、過ごし方が学べる
- ・何でも自分でやりたい時期

4 歳

- ・幼稚園や保育園で集団生活のきまりに触れるが増える。
- ・自分の考えや意見疑問も持ち感情も複雑になり、気持ちが揺れ動くころ

- ・コンプレックスが出てくる。
- ・好奇心が盛んになる。
- ・一人でできることが増え、想像力もより豊かに、
- ・思いやる心や助け合う心がでてくる。他者への共感の気持ちが育ってくる。
- ・言葉への関心も強くなる

3才なら負けて泣くところが、4才になると、泣くのも恥ずかしいし、負けたのも悔しいとより複雑な感情が出てくる。

- ・勇気づけられるもの
- ・力強い主人公のサクセスストーリー
- ・言葉が題材のもの
- ・知的好奇心をかきたてるもの、
- ・想像力がアップするファンタジー絵本(子どものうちはファンタジーを信じやすい)

絵本が与える効果・目的

5 歳

- ・ 数字・文字への興味・理解が深まる。
- ・ 自分の気持ちや要求が伝えられる
- ・ 誰かの役に立つことに喜びを感じるなど思いやりの気持ち
- ・ これまでの経験から他者の行動や感情を理解できる。
- ・ 不思議な世界や未知の世界・昔話も楽しめる。
- ・ ストーリーを追うだけではなく、絵本の世界に入って自分なりに物語を広げる

- ・ 生活習慣の自立
- ・ 知的好奇心の高まり
- ・ 想像力・理解力がより豊かになり、ストーリーを追えたり、
- ・ 科学心の育ち。

- ・ ページをあければいつでもその世界へ行ける喜びを知る
- ・ 知的探究心を満たせる。生きる知恵いっぱいの昔話 →
- ・ 考え、想像する力を養う→なぞなぞ
- ・ 不思議な世界や未知の世界を大いに楽しめる→昔話
- ・ 命の輪廻・戦争・体の仕組・生き物
- ・ フィクションを楽しめない子どもが増えている。 昔話独特の設定や構成が信じられない
想像する力が足りてない。柔軟な時期にこそ読み聞かせを。

絵本の世界に入り込める楽しさが1 番!!

- ・ ストーリーや絵の魅力に惹かれる
 - ・ 言葉あそびのおもしろさを知る
 - ・ 知らない世界に触れる
 - ・ 登場人物の心情を自分のことのように感じ取る力も備わってくる時期
メッセージ性のあるものでさまざまな事柄について深く考える
 - ・ 表情や表現から相の気持ちを読み取れる
- 思いやりや仲直りがテーマの本